

要旨

本論は、陶芸制作を事前に与えられたコンセプトの具現化としてではなく、土と釉という素材と、成形・焼成プロセスの相互作用から立ち上がる「流動的なシステム」として捉え直すことを目的としたものである。中国陶磁史における青銅器や玉石の模倣の系譜を踏まえ、陶が他のイメージや概念を表象する「媒体」として機能してきた側面を指摘しつつ、本研究では外在的な意味の通訳手段から離れ、素材そのものの在り方に立ち返る視座を採用した。合わせてロラン・バルトの「作品／テキスト」論に着想を得て、完成品よりも生成過程に焦点を移し、土と釉の「流動性」を手がかりに、素材が制作の中で自ら語りうるかを実践的に検証した。

第一章では、作品の意味生成を事前のコンセプトの翻訳ではなく、手を介した素材との対話過程において立ち上がるものとして捉え直した。土と釉を対立する二項ではなくスペクトル上の連続体として位置づけ、「土／釉」を貫く流動性という視点から、素材・プロセス・結果の関係を整理した。また、流動性をもつ素材に向き合うとき、成形・装飾・焼成は固定的な手順ではなく、相互に入り組みながら形態や模様を生成する契機であることを示し、意味は完成物ではなく制作プロセスそのものに宿するという立場を明らかにした。

第二章では、この素材観に基づき、土と釉の中間に位置する「流体坯土」を定義し、その調製法と物性を検討した。土と釉薬を連続的に結ぶ坯土を用いて「塗り付け成形」「流し掛け成形」「イッチン成形」の三技法を展開し、薄い膜状の坯体や線状構造を構築したことについて言及した。市販の磁器土と石灰釉を用いたテストにより、土・釉比率が熔融傾向や透光性、成形強度に与える影響、坯体の厚みや模様の規則性と焼成変形の関係、匣鉢や専用窯道具による支持方法などを検証し、素材・成形・焼成が複合的に関与する「流動システム」としての振る舞いを具体的に論じた。

第三章では、とりわけ乾燥・焼成過程で顕在化する「割れ」や「垂れ」に着目した。粘土粒子と水分の比率変化に応じて可塑性—流動性—機械強度が連続的に移行するプロセスを整理し、その途中で生じる応力不均衡として多様な割れを分析したうえで、従来「失敗」とされた造形上の崩れを、素材が高温下で新たな均衡点を探る動きとして解釈し直した。こうした理解に基づき、流体坯土を三層構造で用いた提出作品「Flow I～IV」を制作し、酸化・還元という異なる焼成条件のもとで、土と釉の配置、変形、透光性の変奏を検証した。自然光を取り込む展示空間においては、逆光によって内部構造と流動的な模様が浮かび上がり、素材の流動性と環境光とが重なり合う視覚体験を提示した。

以上より、本研究は、陶芸とは素材・成形・焼成の三者が相互に作用し合い、その均衡のなかで立ち上がる「流動的なシステム」として理解しうることを示した。筆者は学部以降、泥漿や土と釉薬の混合実験を継続し、既存技法を身につけたうえでその前提を問い直すことで、本論に至った。素材を言葉で説明するのではなく、素材を通じて素材自身に語らせることは可能かという問いに対し、本研究は最終的な解答を与えたわけではないが、流動性と割れ・変形を積極的に引き受ける制作実践を通じて、陶芸を外在的な意味の媒体から、素材の潜在的可能性に応答し続けるプロセスへと捉え直すための一つの枠組みを提示したと言える。